



文と写真●KTA☆brasil  
協力●駐日ポルトガル大使館  
ポルトガル政府観光局/神戸市立博物館

連載 35 新時代ラティーナ現場最前線!



# 2013年ポルトガル人種子島上陸470周年!

再発見「日本・ポルトガル史」〜グローバル化の原点と未来☆新時代ポルトガル系音楽の魅力

▼旧ポルトガル領、ブラジルに通い活動し始めて2013年で16年目を迎える。特にポルトガル時代の面影を色濃く残す旧都リオデジャネイロと深く関わり、ポルトガルと同国への興味へと繋がり、ポルトガルを知らずしてブラジルの実態を知ることには出来ないのを知った。後にブラジルが世界中からの大移民・多民族混成による複雑化を辿る以前の、例えば英国を知り米国を知る様な原点・源流への着目だ。個人的なご縁もあった。例えば93年Jリーグのヴェルディ川崎(現東京)に加入したピスマルク選手(元ブラジル代表。リオの名門ポルトガル系クラブC・R・ヴァスコ・ダ・ガマ元主将)との出会いだ。自ずと同クラブの「ブラジルとポルトガルの縁故」を知り、かつてポルトガルの首都であったリオに親しみながら、そのポルトガル性やコミュニティとの交流になった。ポルトガル本国を訪れるだけでなく、最近では東アフリカのモザンビークや西アフリカのアンゴラの人たちと交流、他のポルトガル語圏国との縁へと発展している。リオでは旧ポルトガル王朝ブラガンサ家の影響と独立史とを、今日に伝える名門サンバ・コミュニティ「G・R・E・S・インベリオ・セハ」ノ、そして前述のヴァスコ・ダ・ガマにおいて初の東洋(日本)人正会員として参加してきた。ちなみに前者は当然アフリカ色が強く、後者はアフリカ系市民を排斥せずに招き入れた史上初のクラブとして知られ、両国親交の象徴と、具体的交流を持つ。現在もヴァスコにはポルトガル・ブラジル両旗が関係各所やユニフォームに反映されている。ブラジルを代表する音楽家との関係も深く、今年も各ジャンルの音楽家が集ったライブCD・DVDを発売。ポルトガル音楽や料理の催しも行われている。

★種子島ポルトガル人上陸470周年  
米中韓との関係やTPP問題など、国際社会の荒波に採られる今日の日本だが、ポルトガル船来日時代から「世界と日本との歴史」を見直してみるのはどうだろうか?そして470年以上前から、先駆者のポルトガルは既に世界の海を勝ち、遠く極東の日本にまで到達していたことを。ポルトガル文化は日本人が最初に触れ、今日にも影響を残している西洋文化だ。同国人の初来日は1541年の豊後(大分県)・漂着1543年(42年説)の種子島漂着に始まり、松浦氏による平戸(長崎)貿易を皮切りに同文化は九州から一気に関西・近畿各地へと広がった。様々な物品やカトリック、食文化と共に最初に影響を受けた西洋外国語はポルトガル語だ。既に日本語常用化して久しいものが多数あり、「おんぶ」や「ピンクリ」等を皮切りに、元来ポルトガル語である言葉や、その意味や真意が普段私たちが日本人には忘却されていることも珍しく無い。「南蛮文化」として日本で独自化し、大分、長崎、熊本、鹿児島、そして宮崎県にはポルトガルの影響が今も色濃く残り、郷土料理を見てもそれが顕著だ。破綻する南欧経済(PIIGS)……大不況のスペインではバスコ自治州、カタルーニャ州が独立の気運を見せ、注目されている。ポルトガルはカステリーリャ王国(スペイン)の度重なる制圧から唯一独立を果たし、独自の強い、興味深い国でもある。それは日本と最も古い関係を持つ諸国であることだけに留まらない。列強諸国間の狭間/圧力下にある、海に面した小国同士であること。気候、繊細な感性、音楽性、味覚、国民性、また歴史に至るまで、共通点や相性の良さが多分にあることも見逃せない。現在のポルトガル自体、世界各地のポルトガル語圏諸国



MU展覧会「無」〜ペドロ・コスタとルイ・シャフェス。『映画』と『彫刻』という異なる表現領域で活躍する二人のポルトガル人アーティストによる異色の展覧会が、東京・品川の原美術館にて12月7日(金)〜2013年3月10日(日)に日程で開催中。写真は記者会見時に撮影。

★大ポルトガル語文化圏の新時代  
現在、世界で10の国と地域の約2億5000万人にポルトガル語(以下、ポルト語)は公用語とされ、旧ポルトガル領系の国々または、ポルトガルやブラジルからの移住者を抱える地域でポルト語が広く流通している国を入れると、24ヶ国で使われている言語と言える。かつて同国・同族であったスペインのガリシア州やカリブ諸

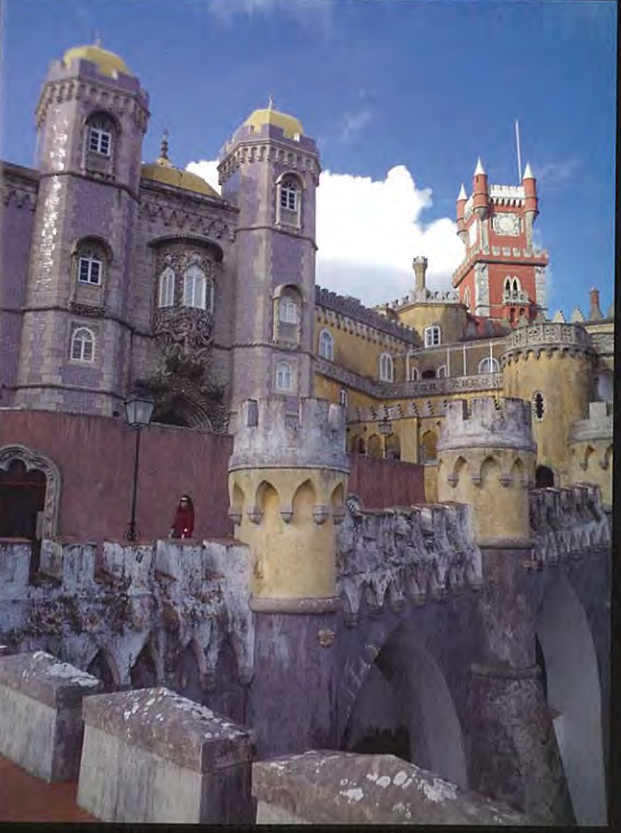
「東周り」を先駆けたことによる世界最大の海洋帝国時代/旧植民地文化への影響は「西回り」を採った旧スペインと比較しても実に広範囲かつ多彩で興味深い。ポルトガル、ブラジル、アフリカ、アラブ、インド、そしてアジア各地の文化を互いに取り入れてきた。そしてポルトガルは原産を持たないことを決めている国の1つだ。表層経済で豊かになくとも、人々が自然体で、素朴に力を合わせ本質的に豊かに生きる姿を見せてくれている。



▲ Rio de Janeiroの世界的クラブC.R.Vasco da Gama本部正門:ポルトガルとブラジルの旗がたなびいている ▲ 狩野内膳筆【南蛮屏風】(桃山時代) 重要文化財:神戸市立博物館所蔵



▲ ベレン(リスボア)名物のお菓子'Pastel de Belém'はその後世界に広まったカスタードタルトの元祖。Casa Pastéis de Belémで撮影。▼カタブラーナ鍋〜海鮮と野菜のリゾット風の料理も日本的な味覚。



▼ シントラ城にて撮影。ポルトガル海洋帝国時代に伝えられた世界各地の文化、芸術様式やその物品を閲覧することが出来る。近くにはモウロ人の城もある。

▼ "Casa do Fado" ポルトガル伝統音楽「ファド」の弦楽器ギター・ポルトゥゲーザ。 ©Jose Manuel

▲ 大西洋へと注ぐテージョ河岸(リスボア)に立つ船型の発見者のモニュメント(高さ50m)。ここから世界へとポルトガル大航海時代の船が出発した。左から3番目がヴァスコ・ダ・ガマ、4番目がブラジルを発見したP.A.カブラル。▼上部から見下ろした広場にある航海者の地図。